

特別寄稿

ビートルズと新島襄を結ぶ糸

—小野英二郎とオノ・ヨーコ—

もと い やす ひろ
本井 康博 (元大学神学部教授)



小野英二郎
(同志社社史資料センター蔵)

「ファミリー・ヒストリー」

去年の夏（八月十八日）、NHK「ファミリー・ヒストリー」にオノ・ヨーコが出演した。収録はニューヨーク。八十四歳のヨーコは健在振りを示し、重症説を一掃してファンを安心させた。さらに同志社人には、場違いの新島襄をいきなり「登場」させて驚かせた。なぜ新島か。

その答えは、ヨーコの家系にある。父方の祖父が新島の教え子なのである。小野英二郎（一八六四年〜一九二七年）といい、日本興業銀行（現みずほ銀行）総裁を務めた。子息の英輔（ヨーコの父）も東京銀行常務取締役。対する母方の家

系も負けていない。ヨーコの母親の祖父は安田講堂に名を残す安田善次郎（安田財閥創始者）である。

新島とビートルズとが見えない糸（しかも極細）で結ばれていることは、同志社では周知されてはいなかった。十五年前、『同志社山脈―百十三人のプロフィール―』（晃洋書房）を編んだ際、私は初期同志社の出身者中、代表的な財界人の列伝をいくつか収録した。小野は、深井英五（日銀総裁）や市原盛宏（朝鮮銀行総裁）と共に同志社が生んだ数少ない「総裁」であるが、孫との関連では認知度は低い。で、小野の列伝を私はこう結んだ。「ちなみにビートルズのジョン・レノン（John）の妻、オノ・ヨーコは小野の孫にあたる」。だが、学内の反応はきわめて鈍かった。

最良の評伝、錦木路易「同志社出身の興銀総裁小野英二郎」（『新島研究』八八、一九九七年二月）にしても、ヨーコの記述はわずかに二行。今回、同志社のチャペルや社史資料センターで私が受けた取材シーンが、ヨーコのいわば学内デビューであった。

柳川から同志社へ

小野英二郎は福岡県柳川の出身。周知の「熊本バンド」の先輩でいえば、海老名弾正と家永（辻）豊吉が同郷である。後輩には加藤延年（延雄の父）や広津友信がいる。このうち、小野が柳川中学校（旧藩校）から同志社へ進む道を開いたのが、海老名と家永である。ふたりは帰省時に青年たちに講演会でキリスト教や西洋文明を説き、同志社を紹介した。小野はこれに刺激を受けて京都市行きを決め、家永に付き添われて京都に向かった（創

設期の同志社）三〇八頁、同志社社史資料室、一九八六年。

水郷の街・柳川の人気は、「どんこ船」による川下り。川の畔には白秋の碑などと並んで、海老名の屋敷跡碑も立つ（建碑の際、私は碑文作成を手伝った）。小野邸はその近くにある。屋敷は取り壊され、門だけが立つ。市当局は跡地を買収して小野記念館を建て、観光スポットにしたいとも聞く。近隣には北原白秋記念館があり、白秋作詞の校歌を展示する。同志社大学歌「蒼空に近く 神を思う 瞳」の楽譜（作曲は山田耕筰）もそのひとつである。

小野は同志社英学校二年次に入り、安部磯雄、川本恂蔵、村井知至、岸本能武太らと同級となった。彼らとの交流は密で、とくに川本はのちに小野の留学に絡む。小野は在学中の一八八三年に、同志社教会で新島襄牧師から津田元親（津田仙

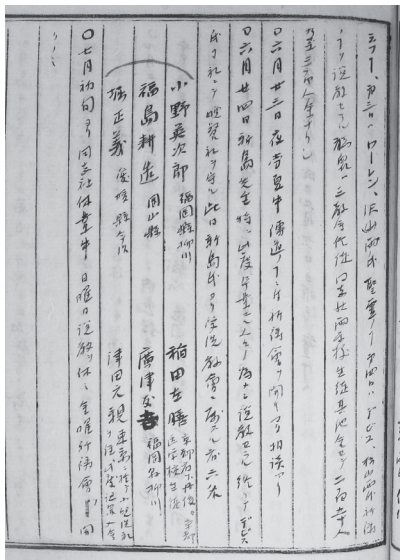
の長男）や同郷の広津らと洗礼を受けた。が、同年末の徴兵令改正を受けて、最上級の五年生にもかかわらず、退学を決意。徴兵回避が可能な官公立への転校を企てた。

その決断は早かった。校内の全寮生を集めて、改正徴兵令の全文を読み聞かせた翌日（一月二日）には、率先垂範してみせた。友人のこの日の日記には、小野は「大阪辺ノ師範学校」受験のため友人たちに「告別シテ発足」とある（『池袋清風日記』上、九〇一〇頁、同志社社史資料室、一九八五年）。

退学の件はもちろん校長の新島にも相談した。いったん帰省した小野は、受験のために東京に赴く途次、京都で新島と再び面談した。小野の入浴は一八八四年三月十一日のこと（同前、一〇八頁）、おりしも新島は二度目の欧米旅行に旅立つ直前であった。

同志社からオペリン大学へ

受験先は大学予備門（東大の前身）であった。漢学の点数が足りず不合格となるや、すかさず方針転換を計った。留学



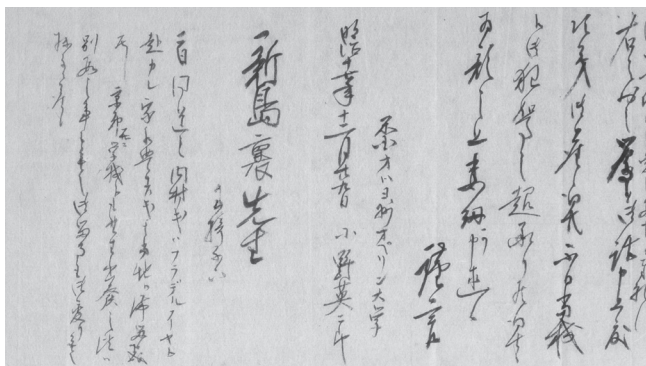
1883年6月24日、新島から受洗
（「第二公會録事」同志社社史資料センター蔵）

である。早くから川本の勧めがあつたからでもあろう。「西洋二行つて「徴兵を」逃かれ様と、私と神戸の川本恂蔵と二人で洋行二決した」(『創設期の同志社』三〇頁。「」は本井)。川本は小野に先立つて渡米し、オベリン (Oberlin College, OH) に入学した。

東京で相談をもちかけた人たちの賛成も心強かつた。「曾我中将や文部省ノ人々ニ示談シ、米國ノオブリン大学校 (川本恂蔵氏ノ学校) ニ入校ニ決意。七年ヲ経テ、日本ニ帰ルベシト」と即断した(『池袋清風日記』下、一六四頁)。「曾我中将」は曾我祐準陸軍中将、「文部省ノ人々」とは清水彦五郎らで、いずれも同郷であつた。

京都でも同志社の宣教師たちの意見も聴取した。新島はすでにヨーロッパに旅立っていた。恩師のD・W・ラーネツドを始め、J・D・デイヴィス、M・L・ゴードン、C・M・ケイデイスはこぞつて賛同し、全員がオベリン大学学長への推薦状を認めてくれた(『新島襄全集』九下、一三〇頁)。費用は父親がなんとか工面した。

横浜出港は十一月五日。奇しくも同郷の家永も同じ船でオベリンへと発つ。彼是小野を柳川から同志社に連れ出したばかりか、今度もオベリンまで小野を同伴する。ちなみに、フライデルフィアに行く内村鑑三も、小野と同じ船室になった。



オベリン大学から新島に宛てられた小野書簡
(1884年12月29日。同志社社史資料センター蔵)

大学に着くと、ニューヨーク州のサナトリウムで保養中の新島に近況と抱負を書き送った。「基督教ヲ基トスル教育家と学者之必要ヲ切ニ相感シ申候」ゆえに、六、七年間、ここで「神学及一、二之学科」を専攻。帰国後は「神ト真理ヲ友トスル人物ヲ養成」して「先生御働之一部分」を担いたい、と(『新島襄全集』九下、一三〇頁)。小野は同志社在学中に「新島先生の感化」を受け、「小新島にならう」と決断していた(『創設期の同志社』三一〇頁)。学生から見ても、師の新島こそ誰よりも「神ト真理ヲ友トスル人物」であつた。

ちなみに、オベリンに先に留学していた川本も、帰国後は小野と同じく同志社に戻り、新島が設立した同志社病院で医師として恩師の宿志を果たそうとした。ふたりは共に「小新島」を目指した同志でもあつた。

帰国して同志社へ

小野は一八八七年からミシガン大学大学院に進んで理財学(経済学)を学び、博士号を得た。が、その直後に父の死に

遭い、一八八九年十一月に帰国した。「魂の父」新島が死去する二か月前であつた。東京で療養中の恩師に二度面談し、手紙のやりとりも二度できた。新島は病軀を押して関東に赴き、大学設立募金のために最後の死力を振り絞っていた。同志社大学実現には小野の力が不可欠、と新島は力説した。そのため、さらなる研修をドイツで積むよう勧めた。

残された病弱な老母や家計を考慮して、小野は即答を渋つた。が、新島はあくまでも招聘にこだわり、留学費用は同志社が、留守家族の面倒は自分が引き受ける、とまで説得した。結局、小野の確約が得られないまま、新島は不帰の人となった。小野は留学せずに、故郷の橘蔭学館で教頭を務めた。が、やはり「小新島」たらんと決意し直し、翌年、同志社に戻つて新島の遺志の実現に取り組んだ。

当時を回想して「それで、〔新島〕先生とは片約束の様な工合〔具合〕になつて居たので、明治二十四年(一八九一年)九月、同志社ニ政法学校を起こしてやつたのである」と述懐する(『創設期の同志社』三一頁)。死去直前に告げられ

た恩師の志と夢は、小野には遺言にほかならなかつた。「片約束」と言う以上、小野は「時が来れば」と応答していたのか。

京都ではさつそく同志社政法学校の開校準備に着手した。新島死後の翌年、一八九一年に仮開校(正式開校は翌年)させるや、同校教頭(校長は同志社社長の小崎弘道)に就任。イエール大学で経済学を専攻した先輩の市原が帰国すると、教頭職を譲つた。小崎も市原も「熊本バンド」である。しかし、市原が一八九五年に日銀に転出するや、小野は教頭に復職した。

キリスト教主義に立つ政法学校は、一八九〇年代に吹き荒れた国粹主義の暴風のただ中で翻弄され、学生募集に苦闘した。最後の数年は開店休業であつた。小野は正規の廃校(一九〇四年)を待たずに一八九六年に辞職。やがて市原の後を追うように(川田小一郎日銀総裁に招かれて)日銀に入行する。

後任教頭は「熊本バンド」の浮田和民市原、小野に続く九州人である。九州人と言えば、小野は同志社退職の年に、同



ハリス理化学館前での同志社政法学校教員・学生たち
(同志社大学神学部蔵)

同志校友会の二代目会長に就いた。初代の加藤勇次郎から小野を経て、原田助(第三代)、吉田作哉(第四代)に至るまで四人そろって九州人(うち二人は「熊本バンド」)である。

日銀に入つた小野はその後、興銀に転じ、海外勤務や出張も含めて、中国や欧米を駆け巡つた。最後は総裁(第四代)となつたが、現職のまま五十九歳で死去した。級友だつた安部磯雄は、「清廉な一生だつた」と弔辞で称えた。

税所鶴

同志社入学から教頭辞任に至るまで、

小野は新島や「熊本バンド」から大きな感化を受けた。とくに最後の政法学校時代に、同じく「熊本バンド」の指導を受けた女性と出逢って結婚に至るのは、奇しきことである。岡山出身の税所鶴である。

番組は、鶴の父親が岡山藩士（税所篤人の息子、母親が二本松藩士の娘（丹羽嘉興）である点に注目。戊辰戦争で相互に闘った藩にもかかわらず、どうしてふたりがめぐり逢い、結婚できたのか、その消息を執拗に探ってみせた。二本松と言え、鶴ヶ城と並ぶ会津戦争の激戦地。籠城戦を戦った新島夫人（山本八重）にすれば、特に京都では嘉興は心許せる数少ない会津人であつたであろう。

英二郎と鶴の結婚は一八九一年八月三十一日。新婦は同志社で学んだことはなかったが、新島が設立した京都看病婦学校（校長は小崎）で働いていた。彼女は当初、同志社姉妹校の神戸英和女学校（神戸女学院）に入学したが、それには「熊本バンド」の金森通倫の力が大きい。そ

れが読み取れるのが、青木要吉による同志社入学時の回想である。

「私は十二月の末、〔岡山教会牧師の〕金森通倫氏に伴はれ、恰度神戸女学校へ行く途中の小野英二郎氏の夫人〔となる〕つる子氏と同船して、神戸迄行った」（創設期の同志社「二一頁」）。

金森の岡山伝道は、横井時雄の今治伝道と並ぶ「快挙」で、ふたりとも赴任まもなく教会を立ち上げた。岡山教会の伝承では「教会設立に尽力したひとりが税所篤人」という。ならば税所家は一家そろって信徒や求道者であつた可能性が高い。

これを裏付けるのが、アメリカ留学中の税所類三（野村家から迎えた税所家の養子で、鶴の婚約者）が実家に宛てた手紙（高畑富子氏所蔵）である。文中に篤人と金森の名前が記されている。類三は信徒のうえ、神学・医学研究のために留学しただけに、税所家には持つてこいの婿養子であつた。だが、鶴との結婚前に病死してしまった。

ほかにも、税所家にはこう伝わる。高畑氏によると、鶴の母（嘉興）は娘たち

マン（女性伝道師）として、京都に呼び寄せたとしても不思議ではない。

もうひとりの可能性もある。女医のS・C・バックレー（S.C. Buckley）である。夫は同志社の神学教授である。英二郎の遺品（孫の小野有五氏蔵）に、バックレー夫妻が英二郎夫妻に贈つた家族写真（撮影は京都）が混じる。裏面の献辞、"To our esteemed friends, Mr. & Mrs. Y. Ono"（英二郎は自身"Yejiro-on"表記）から、家族ぐるみの交流が窺える。鶴が仕えたのは、タルカットだけではなくバ



家族写真。1896年6月、京都室町一条上ルの小野邸で。前列左から妹、次女、鶴、英二郎、長男、不明。後列は最後の政法学校学生か（小野有五氏提供）。



1891年6月、京都看病婦学校舎前での第4回卒業式記念写真。3列目左から2人目が小野、3人目が鶴（『京都看病婦学校五十年史』から）

に「教会に行きなさい」と熱心に勧め、教会から戻ると「それはよかった」と菓子を与えた。番組では「岡山では嘉興も聖書を読んでいた」との税所宏子氏（鶴の孫）の証言を紹介したうえで、「母の影響もあつて、鶴は幼いころからキリスト教に接していた」とのナレーションを流した。

この税所家にキリスト教を説いたのが、金森や宣教師であつた。キリスト教系学

ックレーも考えられる。

いずれにせよ、鶴の宣教師ネットワークは、英二郎のそれに引けをとらない。夫妻の生涯、とりわけ前半は、共通して「熊本バンド」や同志社系のミッション（アメリカン・ボード）との繋がりが濃い。

英二郎・鶴の子と孫

英二郎と鶴は二女五男に恵まれた。京都で生まれた長男の俊一は、長じて翻訳家として名を成すが、ほかにも小野アンナとの国際結婚が有名である。一九一四年、ロシア留学中に帝政ロシア貴族の血を引く旧家の娘（音楽家）と恋愛し、ロシア革命のさなかに結婚した。俊一が国際結婚に踏み切つたのは、小野家の隣に住んだアメリカ人、新渡戸満里子（稲造夫人）の影響もあつたのでは、との推測もある。

アンナと離婚後、俊一は日本人女性と再婚した。その子が小野勇五氏（北海道大学名誉教授）である。オノ・ヨーコの従兄弟にあたる。

英二郎の次男、英輔は東大数学科を出たにもかかわらず、英二郎の強い指示で

横浜 正金銀行しょうぎんに入行した。新島の大口支援者であった原六郎が、かつて頭取第四代よだい」を務めた銀行である。英輔はアメリカ駐在などを経て、最後は後身の東京銀行で常務となった。芸術家としての資質に恵まれ、元々ピアニスト志望であった。が、「總裁」の子として、不本意ながら銀行員に転身せざるをえなかった。

一方、英輔の妻、磯子は安田善次郎の孫そうした煌びやかな家系（母方と父方とも）から生まれたのが、洋子（オノ・ヨーコ）である。

ヨーコは東京で誕生したが、父親の転勤に伴い、日米の諸学校・大学で教育を受けた。祖父や父親から芸術性や国際性を生まれながらに受け継ぐ点は、妹の小野節子氏も同様で、小野家のDNAをヨーコ以上に保持する。永年、国際公務員として世界銀行（本部長）や米州開発銀行で活躍した（ちなみに弟の啓輔氏は三菱商事）。大蔵省との人脈を築くためにヨーコの知人、土井たか子（日本社会党委員長、同志社大学大学院修了）の力を借りたこともあったという。

しかし、最終的に晩年に行き着いたの

は彫刻家への道である。彼女の自伝『女ひとり世界に翔ぶー内側からみた世界銀行二十八年』（講談社、二〇〇五年）の書名は暗示的で、姉同様に世界に飛翔する。いまでも姉妹そろってアメリカに住む。

オノ・ヨーコとジョン・レノン

三度に及んだヨーコの結婚も、国際的である。最初の夫は親の反対を押し切つて選んだ日本人の前衛芸術家。二人目はアメリカ人で音楽家・映像作家、そして三人目がイギリス人でビートルズのジョン・レノンである。三度目の結婚生活は、芸術活動の面でも二人三脚であった。

ヨーコとレノンの共作のうち、代表作は「イマジジン」（一九七一年）であろう。リリース以来、四十数年間、ジョンの作詞として扱われてきたが、去年の六月、全米音楽出版協会が共作と認定した。音楽の教科書には、今後、ヨーコの名前が入るであろう。

「イマジジン (Imagin)」との呼びかけが始まるこの詩について、ジョンは生前、詩集『グレイプフルーツ』（一九六四年）

から採ったと告白していた。同書はジョンが作詞する七年前にヨーコが自費出版した詩集。その中の「ツナフィッシュ・ブリス・サンドウィッチ」という詩は、「想像してごらん、千の太陽が一度にのぼるところを」と詠う。ジョンはこのフレーズに感銘を受けて、曲のタイトルなどに使ったのである。

代表的な反戦歌とも言われるこの詩のベースには、ヨーコの平和思想が潜む。彼女は前衛芸術家ばかりか、夫同様に平和運動家でもある。夫妻には共通の根があるのだろうか。ふたりの平和運動の水脈は何か。上毛カルタの読み札（「へ」）平和の使徒、新島襄（か）との繋がりを「イマジジン」するのも、あながち無意味だとは言えまい。

番組を見た本学院生は、「平和をテーマにしたパフォーマンス芸術に心を打たれた」と感想を寄せてくれた。学外の方からも、「彼女はジョン・レノンの側からしか評価されていないが、彼女の世界観、LOVE&PEACEの原点に新島先生も居られたことが、わかりました。世界は一つですね」と伝えられた。